

日蓮大聖人御書全集

そやにゅうどうどのごへんじ

曾谷入道殿御返事

もんじそくほとけ

こと

(文字即仏の事)

そやにゅうどうどの「へんじ もんじそくほとけ こと

曾谷入道殿御返事（文字即仏の事）

ぶんえい

ねん

がつ

さい

そやきょうしん

文永12年（75）3月

54歳

曾谷教信

ほうべんぽん ちようぎょう か まい そうろう さき まい そうら 方便品の長行、書き進らせ候。先に進らせ候いし

じ が げ

あいそ

よ

自我偈に相副えて読みたもうべし。

きょう もんじ

しょうじんみようかく

みほとけ

この経の文字は、皆ことごとく生身妙覚の御仏なり。

われ

にくげん

もんじ

み

しかれども、我らは肉眼なれば文字と見るなり。例せば、

がき ごうが ひ み ひと みず み

かほう したが

かほう

ひとみずみ

てんにん

かんろ

み

餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見る、天人は甘露と見る。

みず いち

かほう

しだが

きょう

もんじ

もんじ

水は一なれども、果報に随つて別々なり。この経の文字は、

もうげん もの

み

にくげん

もの

もんじ

み

にじょう

こくう

盲眼の者はこれを見ず、肉眼の者は文字と見る、二乗は虚空

み

ぼさつ
むりよう
ほうもん

ほとけ
いちいち
もんじ

み

ほとけ

いねんな
いつしん
りょうぜんじょうど

もんじ

こんじき

と見る、菩薩は無量の法門と見る。仏は一々の文字を金色の
釈尊と御覽あるべきなり。「即ち仏身を持つ」とは、これ

なり。されども、僻見の行者は、かようにめでたくわたら

せ給うを破し奉るなり。

ただ相構えて相構えて、異念無く一心に靈山淨土を期せ

らるべし。「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは、

六波羅蜜經の文ぞかし。委細は見参の時を期し候。恐々

謹言。

ぶんえいじゅうにねんさんがつ

にち

文永十二年三月

日

日蓮

花押

きんげん

ろくはらみつきよう

もん

いきい

げんざん

とき

ご

そうちろう

きょうきょう

そやにゅうどうどの

曾谷入道殿